

上平遺跡

伊那南部広域農業団地農道
喬木村小川上平地区建設に伴う発掘調査報告書

1992年9月

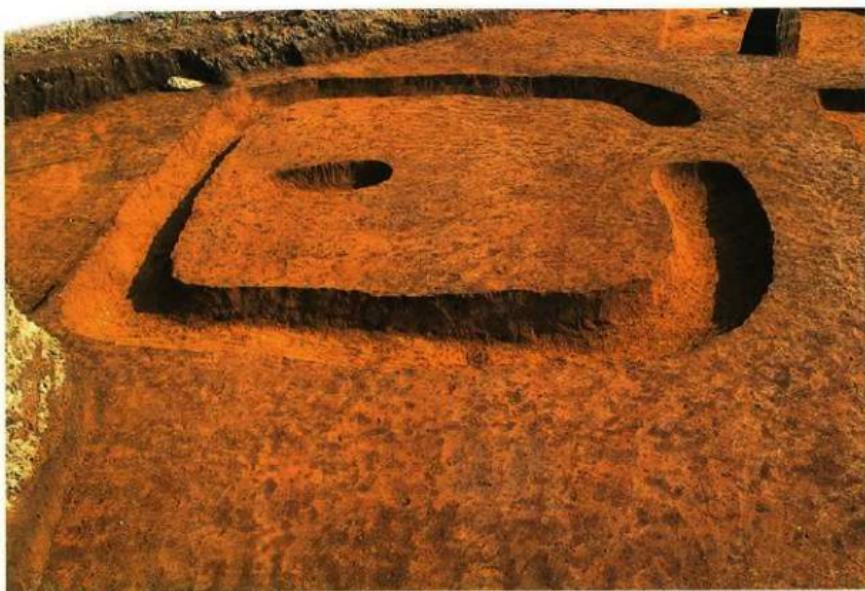
長野県下伊那地方事務所
長野県下伊那郡喬木村教育委員会

上平遺跡

伊那南部広域営農団地農道
喬木村小川上平地区建設に伴う発掘調査報告書

1992年9月

長野県下伊那地方事務所
長野県下伊那郡喬木村教育委員会



上平遺跡 方形周溝墓 1号



上平遺跡 中世後半建物址（窯炉裏検出前）

序

伊那南部広域営農団地農道が小川川を渡り中段地帯から小川上平を通り、隧道で帰牛原へ出る工事が行われる事になり、村では下伊那地方事務所より委嘱を受け発掘調査を行いました。

発掘を行った所は村道上平線の南側にあって周囲は農耕地が多く上平地区の人家にも近く更に近くには曹洞宗の名刹眞淨寺もあり、交通事情のよい所であります。

調査は寒さの厳しい3月はじめを主に行われました。

調査面積は約500m余でそこからは此の地域で生活した先人達の住居址や遺物が出土いたしました。

縄文中期、弥生後期の土器片や石器類が住居址では縄文期のものや上平地区の北の丘陵にある松下城跡の関連武将の屋敷跡と思われるものなど、身近に感ぜられるもので此の地が上平の今の生活と深くかかわっていった事が推察されます。

本調査は寒さの厳しい季節に入ったため着手出来ず調査期間が短く従事いただいた皆さんには大変ご苦労をおかけいたしました。

下伊那地方事務所のご指導と調査、報告書の作成にご盡力を賜りました佐藤團長を始め、調査に従事された皆さん方、地域の皆さん方の御協力に対し厚くお礼申し上げます。

平成4年8月

喬木村教育長 下岡重尊

例　　言

1. 本書は、平成4年度広域官農団地農道整備事業伊那南部地区の広域農道建設工事が上平地域で施工されることになり、これに伴い長野県下伊那地方事務所の委託により、喬木村教育委員会が受託し、発掘調査を実施した報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集は佐藤が担当した。
3. 遺構実測図作成は、佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤が、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
4. 遺構実測図のうち、ピット内、または横の数字は床面からの深さをcmで示し、縮尺は図示してある。
5. 遺物は、喬木村歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序	1
例 言	2
目 次	3
挿図目次	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境	7
II 経 過	7
1. 試掘調査	7
2. 発掘調査	9
III 調査結果	11
(1) 造構・遺物	11
1. 住居址	11
(1) 繩文時代	11
(2) 弥生時代	16
2. 方形周溝墓	18
3. 土 壤	20
4. 建 物 址	22
5. 配 石	24
6. 造構外遺物	24
7. 上平遺跡発調査出土石器一覧表	25
IV まとめ	26
図 版	27
調査組織	39

挿 図 目 次

第 1 図	上平遺跡位置図	5
第 2 図	上平遺跡及び周辺地形詳図、及び周辺主要遺跡	6
第 3 図	試掘調査図 I	8
第 4 図	試掘調査図 II	9
第 5 図	上平遺跡発掘調査遺構分布図	10
第 6 図	上平遺跡 1 号住居址	12
第 7 図	上平遺跡 1 号住居址出土遺物	13
第 8 図	上平遺跡 4 号住居址	12
第 9 図	上平遺跡 4 号住居址出土遺物	15
第 10 図	上平遺跡 5 号住居址・6 号住居址	14
第 11 図	上平遺跡 5 号・6 号住居址出土遺物	15
第 12 図	上平遺跡 2 号住居址	16
第 13 図	上平遺跡 3 号住居址	17
第 14 図	上平遺跡 7 号住居址・8 号住居址	18
第 15 図	上平遺跡 2 号・3 号・7 号・8 号住居址出土遺物	19
第 16 図	上平遺跡方形周溝墓 1 号	20
第 17 図	上平遺跡土壤 1 号・2 号	21
第 18 図	上平遺跡土壤 3 号・5 号・4 号・6 号	21
第 19 図	上平遺跡土壤出土遺物	23
第 20 図	上平遺跡建物址	22
第 21 図	上平遺跡建物址出土遺物	23
第 22 図	上平遺跡配石 I・II	24
第 23 図	上平遺跡遺構外出土遺物	23

I 環境

1. 自然的環境

上平遺跡は、長野県下伊那郡喬木村小川上平地区に所在する。

飯田・下伊那地方は、東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下して、その両側に見事な段丘面が発達している。天竜川の東岸——竜東地区は背後に赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山(1741m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。

伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面に達し。天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の右岸——竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の三次原・田村原・林原・伴野原・喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く中位段丘面の幅は広く、典型的な段丘地形を形成している。(第1図)



第1図 上平遺跡位置図 (1 : 100,000)

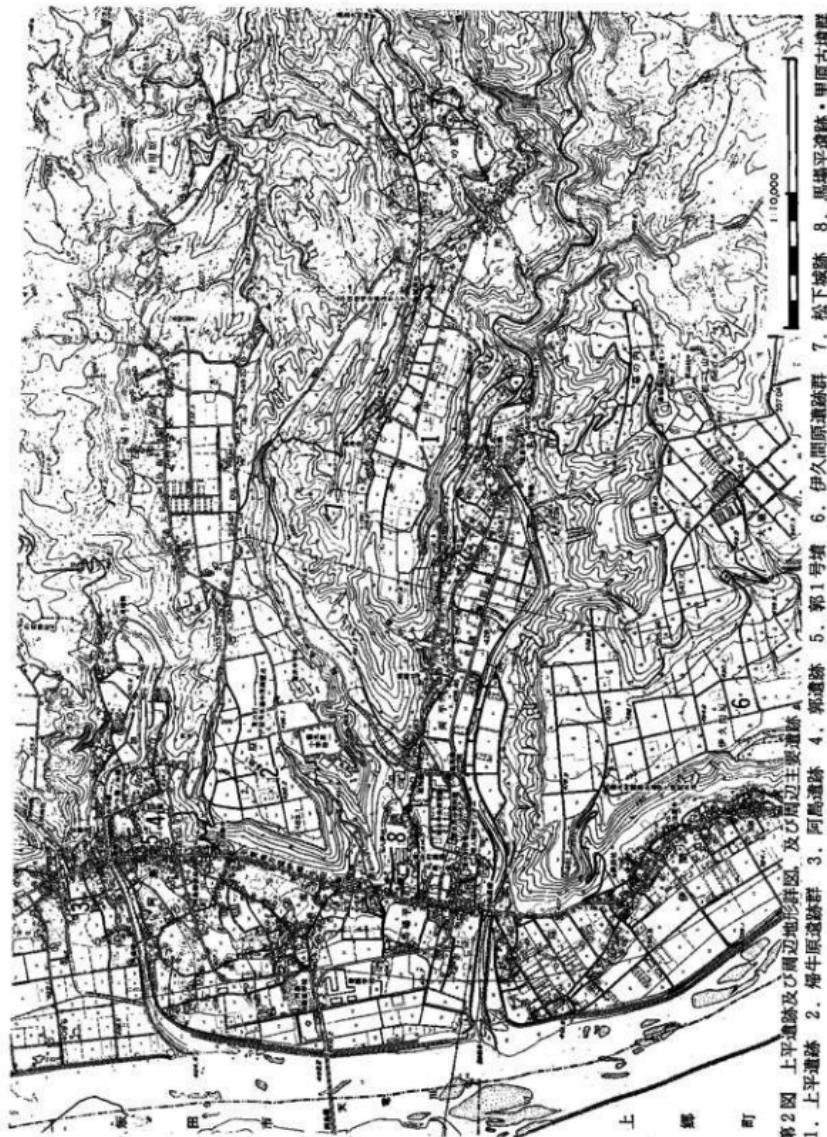
× = 遺跡

小川上平は、伊久間原と帰牛原段丘面の間にあって、南には小川川、西から北3分の1は小川川の支流駄馬沢の浸蝕谷が入りこみ、東西1000m、南北100~200m、標高508~529mを測る。小川川に沿う馬場平・西平・下平の平坦面の北は、比高80mの段丘崖となり、その上に東から西へと細長く延びる段丘面上にある。

上平段丘面の北背後は、比高約50mの急傾斜をもつ南北30~50m、東西700m、標高550~583mの尾根状台地となり、さらに北は駄馬沢の谷となり、谷を越えると帰牛原段丘面である。

微地形をみると、東から西へなだらかに下がる平坦面をなしているが、西端部を小川川の小支流(韓沢)が韓郷神社の東側を北へとび、その谷頭浸蝕が強く東に折れて、深い谷を形成し、段丘面の北側を約3分の1近くまで入りこんでいる。また、段丘面の北側は一段低位となり、旧路路を示すとみられ、現

在水田地帯となっているが、その耕土下はすぐに砂疊層となっている。遺跡は谷頭浸蝕の終わる地点から段丘面の中央部を中心とした南側の畑地帯に展開するものとみられた。(第2図)



第2図 上平遺跡及び周辺地形図、及び周辺主要遺跡
1. 上平遺跡 2. 犀牛原遺跡群 3. 河馬遺跡 4. 郭遺跡 5. 郡1号墳 6. 伊久間原遺跡群 7. 松下城跡 8. 馬場平遺跡・里原古墳群

2. 歴史的環境

上平には、台地西側に的場遺跡・中央部に上平遺跡の存在が知られている。昭和63年、的場遺跡西端部に工場進出に伴なう工事に先だつ調査が行われたが、建設用地内は、かつて天地替えしの深耕が行われたり、一時水田となったこともあり、荒れており、遺構・遺物の発見はなかった。取付け道路が台地中央部を東西方向に付けられ、その調査では、遺跡の東側の用地内に土壙二基と、焼土と床面を残す一箇所を検出したが、いずれも用地外にかかり、一部分の調査に終っている。遺物は、弥生後期の壺形土器半個体と、縄文中期後半の土器片・磨製石斧1・打製石斧3点の出土をみている。

この調査よりみて、遺跡は台地中央よりにあり、二遺跡に分かれているが、範囲を広げれば、その境界は区別できないと思われる。

喬木村内の周辺の主要遺跡をみると、上平台地西端崖下にある馬場平遺跡は縄文前・中・後期、弥生中・後期の遺跡であり、この周辺にある里原古墳群は注目され、現在墳丘を失っているが、1号墳よりは四神四獸鏡・玉類・砥石・甕の出土をみており、4号墳では土師器・須恵器の完形品、円筒埴輪・形象埴輪片の出土をみている。小川川を越えた南の伊久間原段面は、有舌尖頭器の出土をみ、縄文早・前・中・後・晚期、弥生中期・後期、古墳時代前・中・後期等の各期にわたる大集落が検出され、平安時代・中世の遺構も検出されており、注目される遺跡である。

上平段丘の背後の尾根状台の西端には竜東地域に勢力をはった知久氏の支城松下城跡がある。尾根状台地の北の谷を越えると帰牛原段丘面となり、この西側一帯は、縄文中期後半の集落址、弥生後期の集落址が発掘調査され、段丘西端部には弥生後期の方形周溝墓群が検出され注目をひいている。

帰牛原北西側の段丘崖下には、竜東地区唯一の前方後円墳郭一号墳があり、その東側の旧喬木第一小学校跡の郭遺跡の一部発掘調査によって縄文中期後半・後期の集落の存在が認められている。また、弥生中期の遺構もかつての調査で検出されている。加々須川を越えた低位冲積段丘面には、弥生中期前半の阿島式土器の標準遺跡の阿島遺跡がある。

II 経 過

平成4年度、広域営農団地農道整備事業伊那南部地区の広域農道建設工事は喬木村小川上平地籍で行われることになった。ここは上平遺跡となっており、このため工事着工前の平成3年度事業として発掘調査が必要となる。喬木村教育委員会は、下伊那地方事務所土地改良課の委託により、発掘調査を実施することになった。発掘調査手順として、試掘調査をなし、調査範囲を確かめ、それによって本調査を行うことにした。

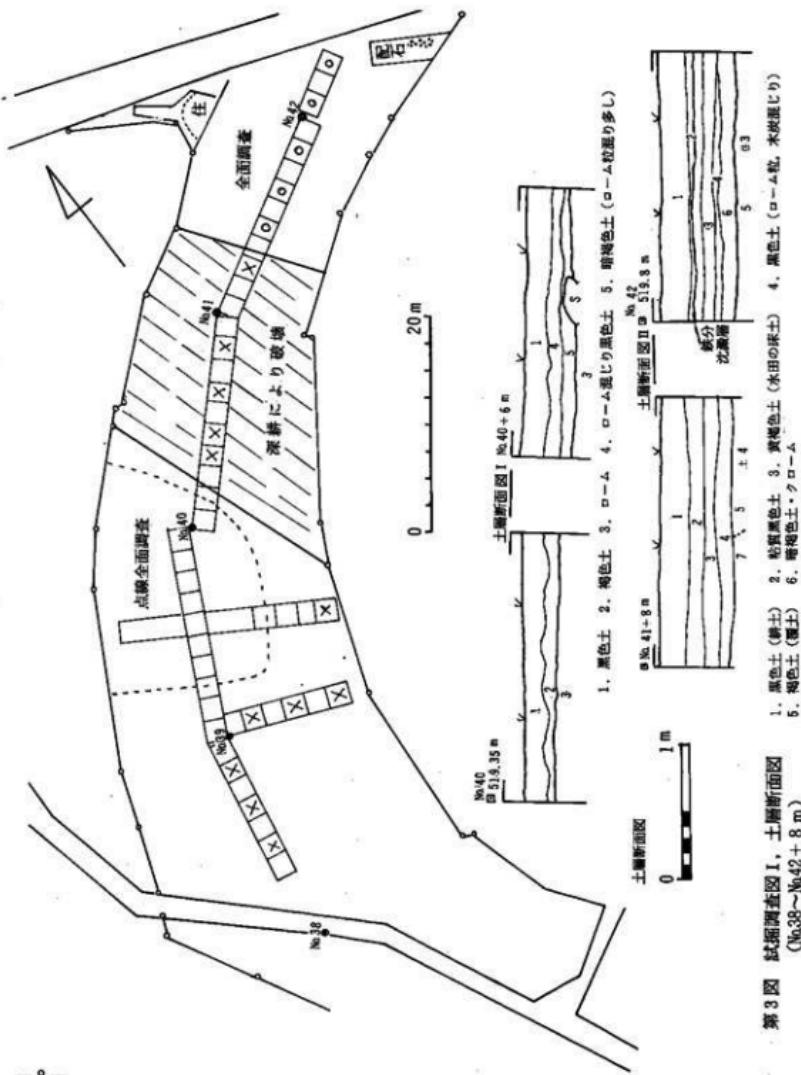
1. 試掘調査

試掘調査を2月28日～3月6日までの5日間発掘調査した。

No38北6m～No42北間の2×2mグリッド25、No43～No46間の2×2mグリッド20を調査する。No43～No46間には遺構・遺物の検出はなく、調査不要と認めた。さらに、No46～No47間は旧流路となり、遺構の存在は認められないとみる。

No.38～No.42間の調査では、No.40北3m～No.41北6m間の畠は深耕により、造構は破壊。調査不要。

No.39北6m～No.40間のひがし7mは造構・遺物なく、調査不要と認めた。その西は弥生住居址1軒の存在を確かめ、さらにその切り合いとみる縄文期の住居址の存在。さらに中世末の陶器片の出土と柱穴が検出され、上平平坦面の北の丘陵にある松下城跡の関連武将の屋敷址の存在が予想され、250m²以上の全面発掘が必要となる。No.41～No.42北6mの範囲では北西隅に縄文中期中葉の1号住の存在が確認さ

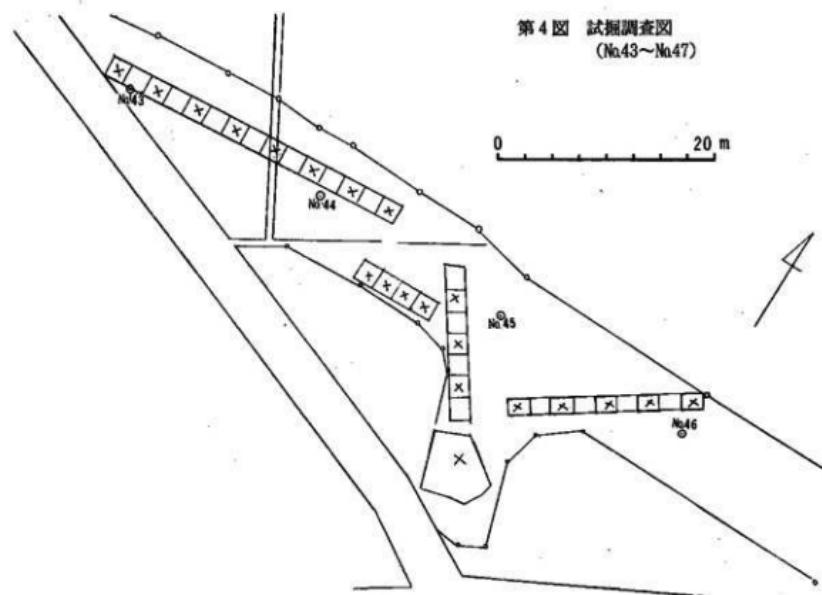


れ、各調査グリット中よりは、縄文中期、弥生後期の土器の出土をみており、それらの重複する遺構の存在が予想され、300m以上全面発掘が必要となる。

試掘調査結果は第3図・第4図に示した。(第3図・第4図)

土層断面でみると(第3図)、No40センター杭では、地表下25cmで地山となり、それより6m北は表土より40cmと深くなるが、耕土下の2・3層の黒色土・暗褐色にはローム粒が多く含まれ、深耕の荒れがめだつ。No41センター杭北8m・No42センター杭では、表土下55~60cm下に遺構の存在がみられ、表土下40cmにはかつての水田の床土があって、その下層に黒色土・暗褐色(ローム粒・木炭を含む)があり、その下層の褐色土が遺構の覆土となっていた。

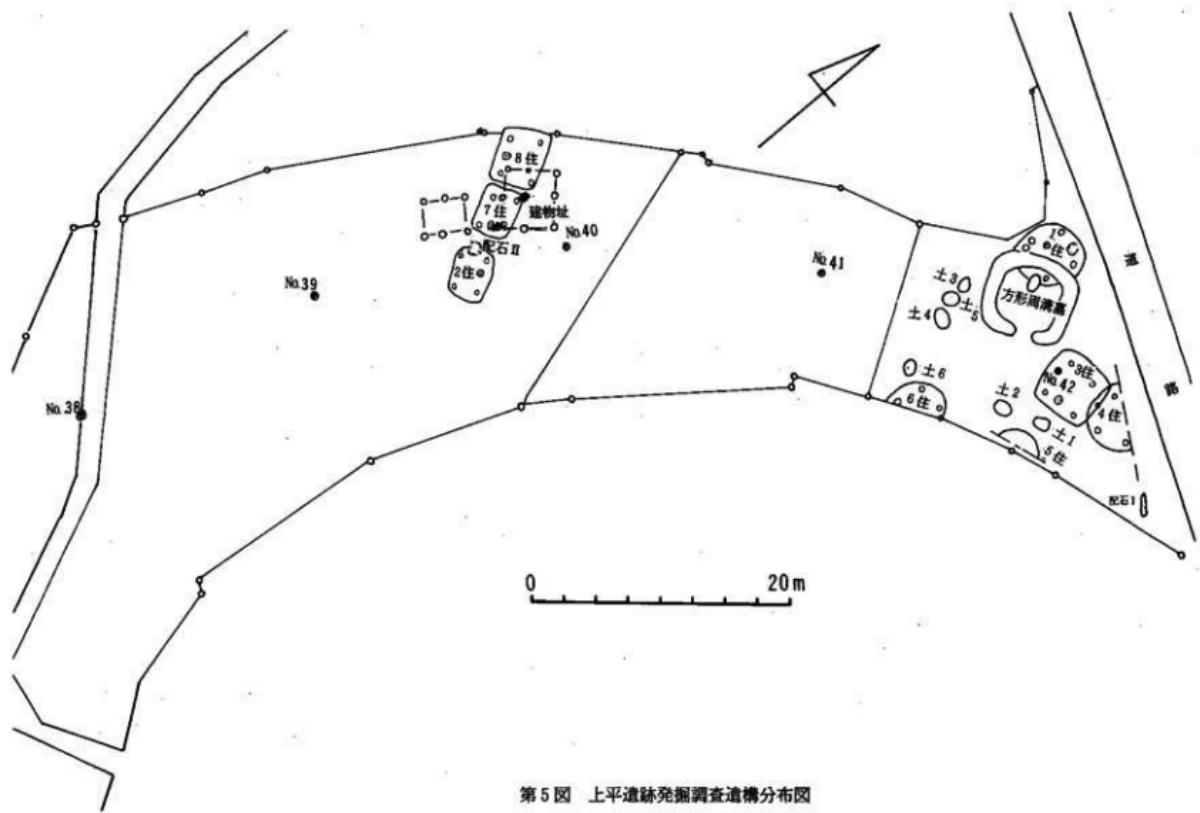
第4図 試掘調査図
(No43~No47)



2. 発掘調査

平成4年3月7日。試掘調査により遺構の確認された個所面積500m²の調査にかかる。10日午後より重機がはいり、調査確認区域の表土排除し、遺構を検出し、その結果、縄文中期中葉・弥生後期住居址8軒、中世後半建物址2棟、方形周溝墓1基、土壙6基を検出し、これらを写真撮影・測量作業を行ない、3月25日現地作業を終了した。

その後、遺物の整理・復元・実測作業・図面・写真の整理等を行ない、報告書の作成にかかる。



第5図 上平遺跡発掘調査遺構分布図

III 調査結果

(1) 遺構・遺物

上平遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。(第5図)

- (1) 住宅址 8軒
 - 縄文時代 中期中葉 4
 - 弥生時代 後期 4
- (2) 方形周溝墓 1基
- (3) 土 墓 6基
- (4) 建 物 址 2棟
- (5) 配 石 2

1. 住居址

(1) 縄文時代

上平遺跡1号住居址(第6図)

調査区域内の北西端部にあり、北は道路に接し、東側4分の1は方形周溝墓の周溝に切られ、東端部は主体部に切られている。深耕によって壁は削りとられているが、床面は堅く残り、柱穴の配置からみて、推定南北4.35×東西5m、の楕円形をなす竪穴住居址であり、主柱穴は4個とみるが、南と南西には2個ずつ並び、その一個はともに浅い。その柱穴については補強のものともみられるが、はっきりしない。

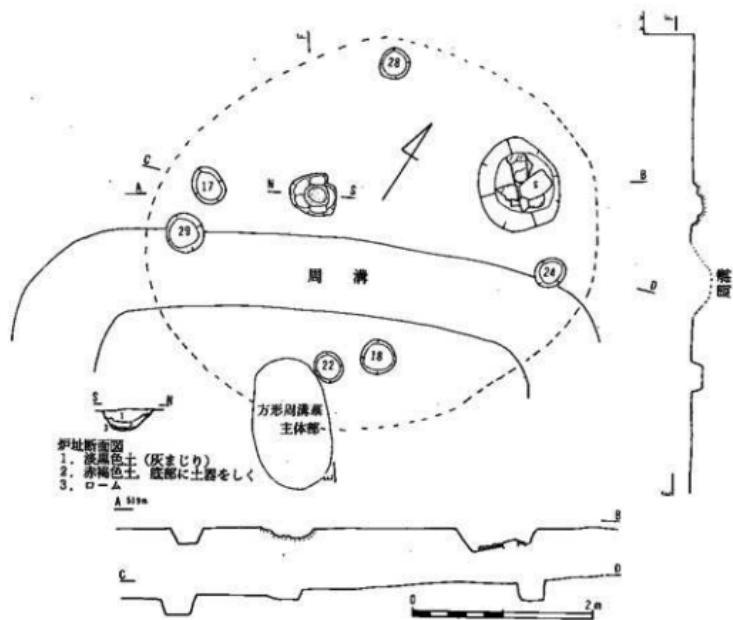
炉址は、西に片寄ってあり、50~55cmの円形の石囲炉とみるが、石ははずされ、その痕跡を残している。底部に土器片を敷いてあるが、いずれも小片である。炉址の内部の焼土は著しい。北東壁近くに103×90cm、深さ30cm、楕円形の土壇ともみられる掘りこみがあり、上層には焼土がみられ、最初は炉址とみて調査したが、覆土は淡黒色土で焼土はみられなかった。内部の北側には一抱え大の石を置き、その下には1個体分とみる土器(第7図1)が底部に重なって出土をみた。

遺物(第7図)、土器は第7図1~2の土壤状掘り出土の土器以外は小片のみで、出土量も少ない。1~2は平出Ⅲ類A土器を主体とし、器形は頸部で僅かにくびれる深鉢で、器壁はうすく、文様は半截竹管状工具による平行沈線文で描かれている。3~5~8の土器は、平出Ⅲ類Aであり、炉址内出土の小片には、綴の平行沈線をもつものが主である。4の爪形文、9~10の半截竹管による連続爪形文の土器は小片ではっきりしないが、縄文中期中葉の土器で、平出ⅢAに伴うものである。

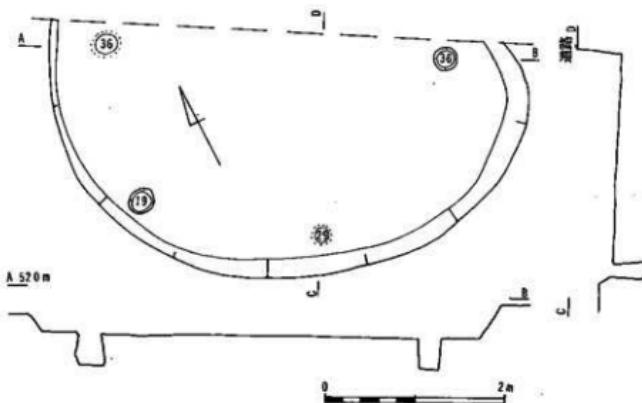
石器には、12~13~16~17の打製石斧があり、16~17は刃部を欠く。横刃形石器には14~15があり整った形をなす。

上平遺跡4号住居址(第8図)

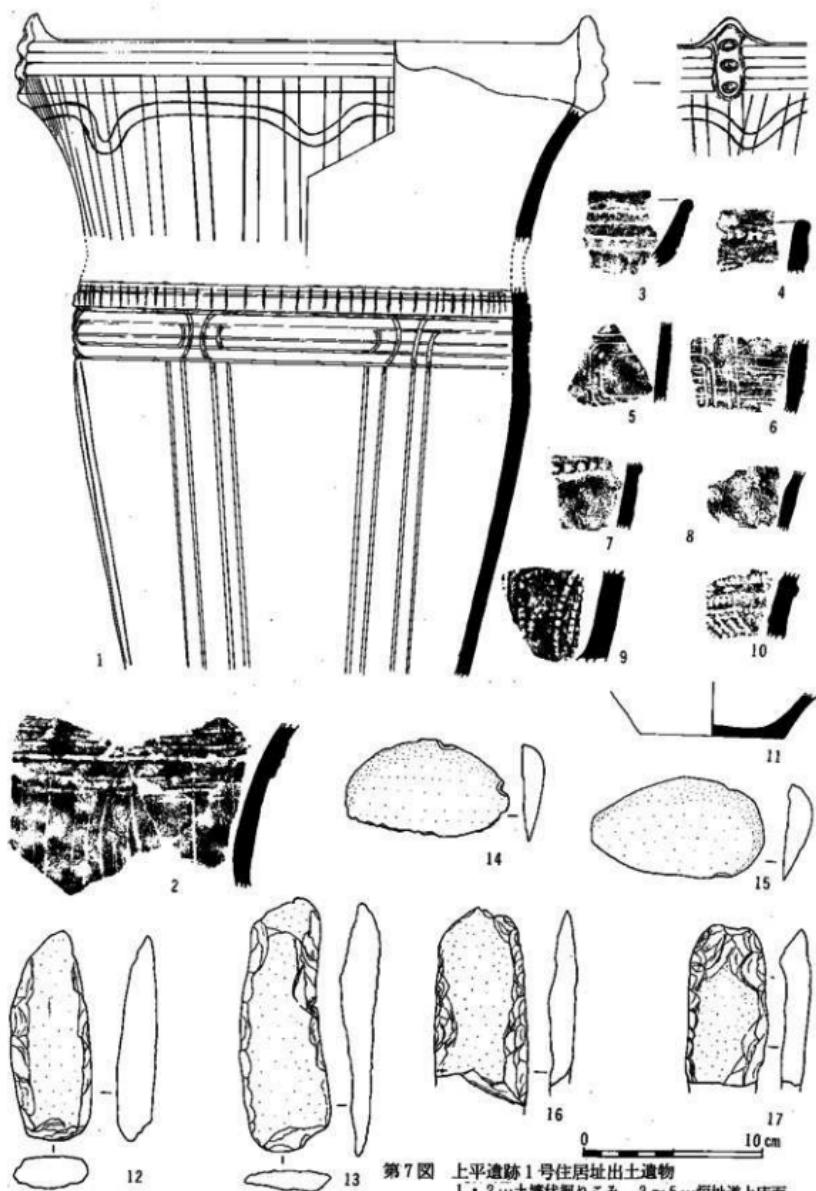
調査区域内の北東端にあり、2分の1は道路にかかり、調査不能となった。推定径東西5mの円形



第6図 上平遺跡1号住居址



第8図 上平遺跡4号住居址



第7図 上平遺跡1号住居址出土遺物
1・2…土壤状掘りこみ, 3~5…炉址道上床面
6~11…下層, 12~17…中層から床面

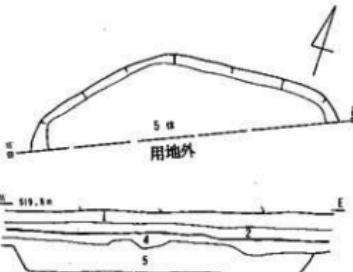
をなす堅穴住居址とみる。床面は堅く、主柱穴は壁に沿って4個検出されているが、その配置からして、主柱穴は6個とみる。炉址は発見されていないが、住居の状態からみて中央より北に寄つてあるとみる。壁高は西側で20cm、東側では40cmと深いが、地形によるものとみたい。

遺物（第9図）は、比較的に少なく、1～5の土器片にみる半截竹管状工具による連続爪形文からみて、縄文中期中葉の土器で、9～14にみる半截竹管文による平行沈線文の土器は平出Ⅲ類Aの土器であり、前者の土器に伴うもので、縄文中期中葉Ⅲ期後半とみる。6～8の土器片は上層出土であり、小片で時期は決めかねがたい。

石器には、上層出土に16～19の打石斧があり、17～19は刃部を欠く。床面出土に20の石鏃、21の打石斧がある。

上平遺跡5号住居址（第10図上）

No42センター杭の南東5mにあり、東側の大半は用地外となり、調査できたのは、東西径3.45m、南北径0.9mの範囲で円形となる部分のみである。境界線の断面をみると第一層の耕作土の黒色土の下は、粘土混じりの黒色土の下にかつて水田であったことを示す鉄分の沈澱層があり、その下にロームまじりの暗黒色土層があり、その下は覆土となる暗褐色土がローム層を掘りこんでいる。壁高25～27cmの堅穴住居址であり、床面は堅いが、調査範囲が限られているため、柱穴・炉址は発見されていない。



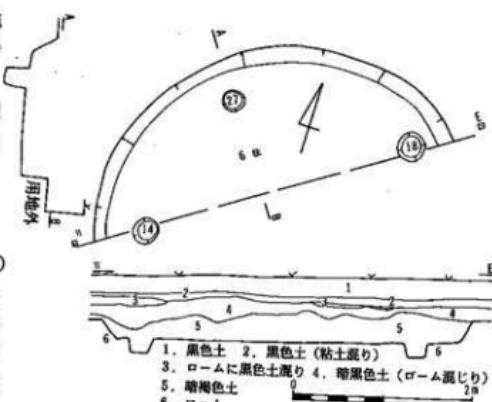
1. 黒色土 2. 黒色土(粘土混り) 4. 暗黒色土(ローム混じり)
5. 暗褐色土 太い線は鉄分沈澱層

遺物（第11図1～5）は少なく、土器は1～3の小片のみで、半截竹管状工具による連続爪形文を施す縄文中期中葉に位置づく土器である。

石器には、4の基部を欠く打製石斧と、5の黒曜石製の石鏃の出土をみている。

上平遺跡6号住居址（第10図下）

5号住居址の南西5m、No42センター杭南9mにあり、南東側は用地外となり、約3分の1の調査で、東西4.15×南北1.55mの範囲であった。整った円形をなすと



第10図 上平遺跡5号住居址・6号住居址

みられる。境界線での断面図（第10図下）でみると、複雑な土層をしており、地表下50cmにローム層を23~25cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は固く、柱穴3個が検出されているが、その配置からみて4個の主柱穴をもつものとみられ、炉址は発見されなかったが、地形的に中央より北東側にあると思われる。

遺物（第11図6~10）は少なく、土器は6~9があり、6は半截竹管による平行沈線文の平出Ⅲ類A土器とみられ、7~9は半截竹管状工具による連続爪形文土器で、縄文中期中葉に位置づくものである。石器には、10の打石斧1点の出土をみたのみである。



(2) 弥生時代

上平遺跡 2号住居址（第12図）

No40センター杭の南6mにあり、北西側の壁は、配石IIによって切られている。南北3.4×東西4mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向N54°Eを示す。壁高は、南側で10cm、北側で15cmと浅い。南側は25mで段丘縁端となり、その比高は2mを測る。その傾斜によって上部の土は流されているとみる。床面は固いが、南側は小礫が多くみられる。主柱穴は4個、整った配置にあり、炉址は北側柱穴間の中間部のやや内側に寄ってあり地床炉である。住居の中央部に径25cm程の円形に焼土がみられたが、掘りこみはない。

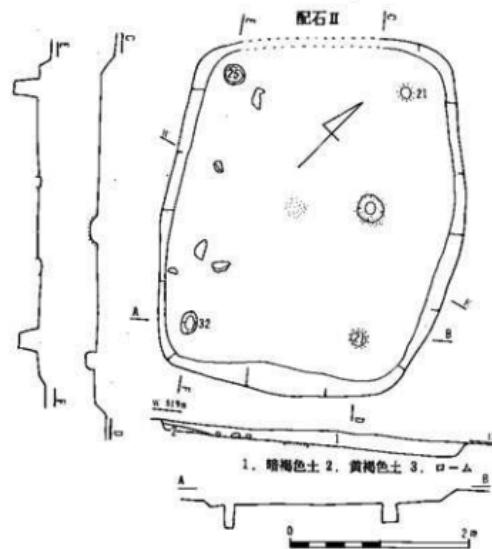
遺物（第15図1～6）は少なく、土器は1～4があり、1・3は壺形の口縁下部で、1は櫛状具による大きな波状文を、3は器肌が荒れ文様ははっきりしないが、太い沈線を施してあり、弥生中期にみられるものである。2・4は無文の胴下部である。石器に5・6があり、打製石庖丁とみられるが、ともに作りは良くない。

出土土器からみて、弥生後期座光寺原式とみるが、小片ではっきりいえない。

上平遺跡 3号住居址（第13図）

No42センター杭が住居址内南西壁寄りにあり、縄文中期中葉の4号住居址南西の1部にのっている。南北4.5×東西4.25m、ローム層に30～35cm掘りこむ隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N170°Eを示す。床面は固く、平坦であり主柱穴は4個整った配置にあり、炉址は南柱穴間の僅かに南に寄っており、石組炉ともみる石の外ずされた痕跡もみられるがはっきりしない。また東側は垂直に近く、深い掘りこみをもって立ちあがっている。

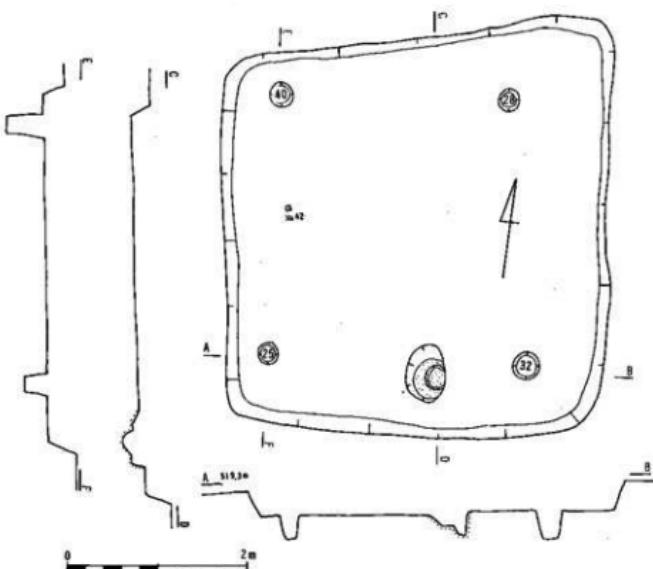
遺物（第15図7～16）は比較的少なく、土器のみである。7・8は壺形で、7は肩部に重複する4分の1円弧文が施され、8は無文の胴上部とみる。9は浅鉢とみられ、10～15は壺形土器で、波状文に斜行短線文の組合せを主とするが、10の波状文のみもみられ、弥生後期前半座光寺原式の新段階に位置づくものとみられる。



上平遺跡 7号住居址（第14図）

No40センター杭西4.5mにあり、8号住居址と北西側は接し、南東側1mに2号住居址があり、三者

第12図 上平遺跡 2号住居址



第13図 上平遺跡 3号住居址

がほぼ同一方向に並ぶ。また、上層に中世の建物址が構築されており、壁の一部は切られている。南北 $4.2 \times$ 東西 2 cm のややくがみをもつ隅丸長方形をなし、ローム層に $25 \sim 30\text{cm}$ 掘りこむ竪穴住居址で、主軸方向はN 100° Wを示す。

床面は固く、主柱穴は4個、炉址は南側柱穴間のやや西に片寄ってあり、地床炉で焼土は著しい。

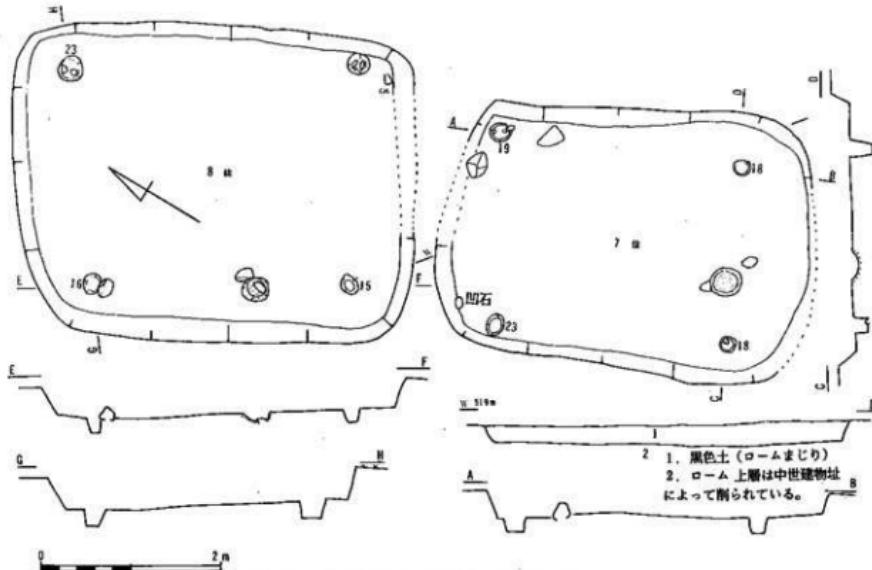
遺物（第15図17～22）は上器が少ない。17～19は壺で、17の口縁部で刷毛状具による整形がみられ、下部に横線文がみられる。18は頸部片で模走文をはさんで、上下に波状文が施される。19の肩部は二段の斜行短線文が施されている。

石器20・21は石鋤で、21は刃部を欠くが、いずれも大形である。22の凹石は砂岩製で上部に2個、下部に1個の深に凹がつけられている。土器は小片ではっきりいえないが、大形石鋤の出土よりみて、弥生後期前半の座光寺原式とみる。

上平遺跡 8号住居址（第14図）

7号住居址の北西に接して並び、わずかに用地外にかかっている。南側の上部には中世建物址が構築されていたため、南壁の2分の1余は削られていた。南北 $4.4 \times$ 東西 3.55m の隅丸長方形をなし、ローム層に 30cm 前後掘りこむ竪穴住居址で、主軸方向N 122° Wを示す。床面は固く、主柱穴4個が整った配置にあり、炉址は西側柱穴間の中央を僅か南に寄ってあり、地床炉で内部に石1個が置っていた。

遺物（第15図23～26）は少なく、土器は23～26があり、23は刷毛目整形がみられるが、いずれも小片で弥生後期の土器であるが、その時期ははっきりしない。26の石棒は南東壁隅に付いて出土した。



第14図 上平遺跡 7号住居址・8号住居址

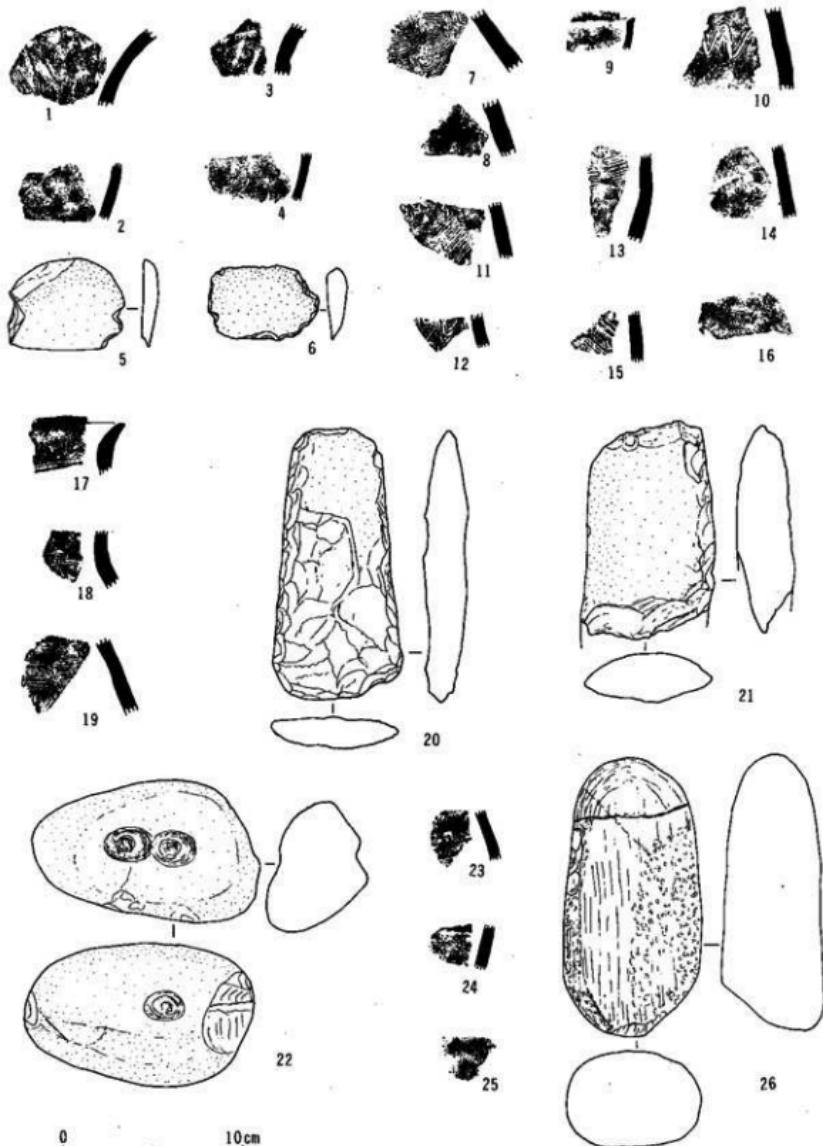
硬砂岩製で丈15.5cm、断面は橢円形をなし、丁寧な作りをなし、頭部を自然の白線が巻いている。

2. 方形周溝墓

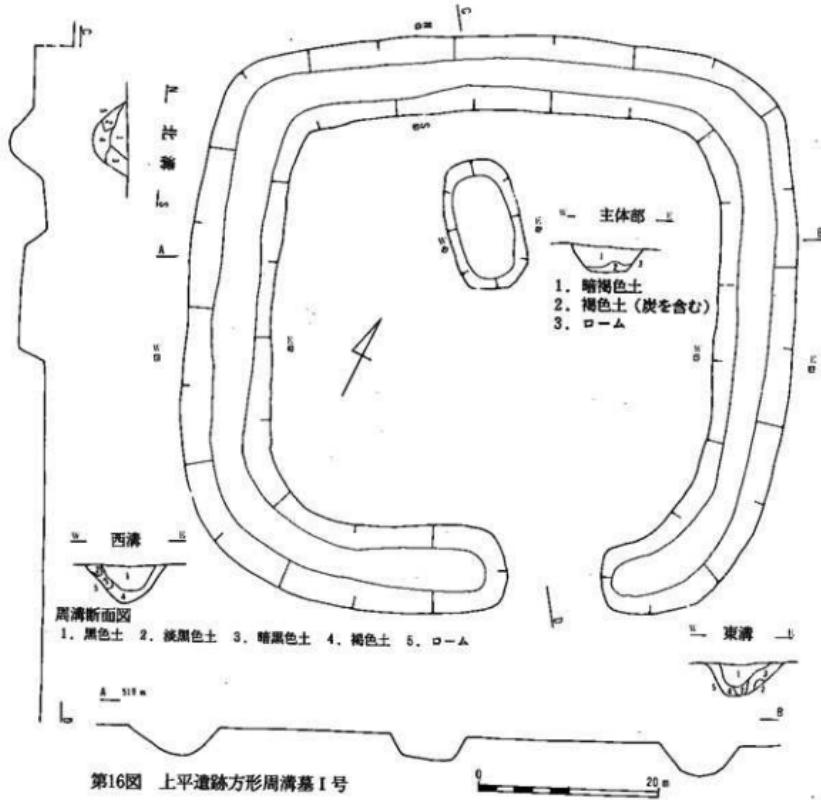
上平遺跡方形周溝墓1号（第16図）

No.42センター杭の西2mに南東部端溝がかかり、縄文中期1号住居址の約4分の1を周溝で切っている。南北6.4×東西6.75mの隅丸方形の範囲に幅0.8~1m、深さ30~40cmの周溝をめぐらせ、南側周溝の中央部に幅1.05mの陸橋が付く。主体部は、北周溝より0.5mはいった位置にあり、南北150×東西85cm。ローム層に深さ30cm掘りこむ整った橢円形をなし、その覆土は上層は暗褐色土。下層は木炭を含む褐色土となり、ロームとなる。主軸方向はN34°Wを示す。

主体部よりの遺物はなく、北周溝よりは縄文中期1号住の土器の出土をみているが、周溝に伴う遺物はない。遺物よりその時期は決めるのがたいが、周辺にある弥生時代後期の遺構よりみて、この期の方形周溝墓とみる。



第15図 上平遺跡2号・3号・7号・8号住居址出土遺物 (1:3)
(1~6…2住 7~16…3住 17~22…7住 23~26…8住)



第16図 上平遺跡方形周溝墓I号

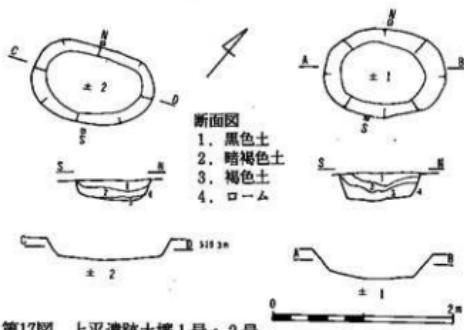
3. 土 壤

上平遺跡土壤1号・2号 (第17図)

1号はNo.42センター坑の南東3.2mに、2号は南4mにある。

1号は $135 \times 100\text{cm}$ の楕円形をなし、深さ32cmローム層に掘りこむ。主軸方向N54° Eを示し、遺物(第19図1・2)には1の斜縄文をもつ土器片と、2の横刃形石器が出土している。縄文中期の土壤とみるが時期ははっきりしない。

2号は東西135×90cmの楕円形。ローム層に深さ25cm掘りこみ、主軸方向N70° Eを示す。遺物(第19図9)は弥生後期壺口縁部があり、立上り口縁部の1部を残すが、4分の1弧円の連続文がみられる。頸部には大きな波状文が施されている。



第17図 上平遺跡土壙1号・2号

上平遺跡土壤3号・4号・5号・6号（第18図）

3号・5号・4号は方形周溝墓の南西に隣し、6号は4号の南3mと離れているが、No.41・No.42センター杭の中間部にあり南北方向に並ぶ。

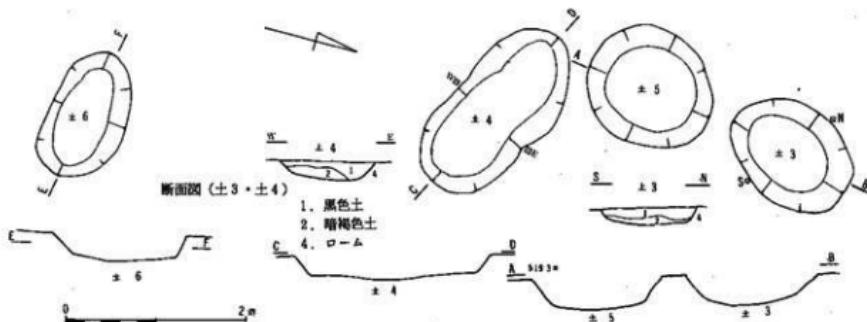
3号は148×110cmの楕円形。深さ35cmローム層に掘りこみ、主軸方向N27° Eを示す。遺物（第19図3）は平行半截竹管文をもつ土器1片のみである。

5号は3号と4号の間にあり、145×130cmの円形で、深さ37cmローム層に掘りこみ、主軸方向N16° Eを示す。遺物（第19図5～7）は5・6の平行半截竹管文をもつ土器片と7の底部片がある。

4号は210×105cm、深さ28cmの長楕円形をなし、中央部に僅かなくびれをもつ。主軸方向N58° Wを示し、遺物（第19図4）は平行半截竹管文をもつ土器1片である。

3号・4号・5号出土土器はいずれも平行半截竹管文をもつ縄文中葉平出III類Aの土器であり、この期の土壤とみる。

6号は147×85cm、深さ32cmローム層に掘りこみ、楕円形をなし、主軸方向N80° Wを示す。遺物（第19図8）は無文土器1片の出土であり、縄文中期の土器であるが、時期ははっきりしない。



第18図 上平遺跡土壤3号・5号・4号・6号

4. 上平遺跡建物址 (第20図)

建物址は南北の2棟よりなり、北側のI号は、No.40センター杭西1.5mに南東端があり、弥生後期の7号・8号住居址の上にのり、南側のII号は、I号の南1.5mにあり、僅かなずれをもって南北に並ぶ。

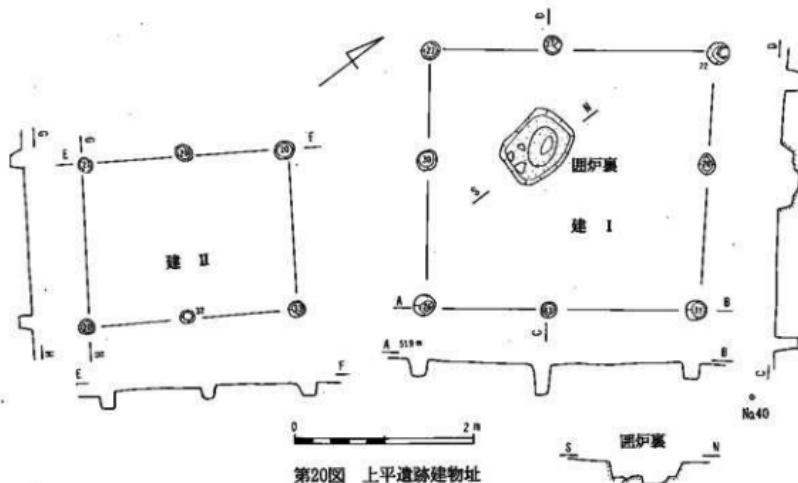
I号は南北3.4×東西3.05mの範囲に2間×2間の建物址である。柱穴間隔は南北は北より1.7m・1.4m、東西は西より1.2m・1.65m、柱穴径は25cm、深さは20~43cmで、柱穴底の大半は7号・8号住の床面となっている。主軸方向N48°Wを示す。

囲炉裏は中心より南西に寄ってあり、70×60cmの隅丸方形をなし、内部の焼土は著しく、中央部は深い掘りこみをなす。遺物の多くはこの内縁より出土している。

II号は南北2.4×東西1.95mの範囲に2間×1間の建物址である。柱穴間隔は南北1.1mと1.1m、東西1.8m、柱穴径20cm前後、深さ20~33cm、主軸方向N52°Wを示す。遺物は小片のみ。

遺物(第21図)は囲炉裏を中心に出土をみており、1は壺、2は大形甕胴下半部で鉄軸がかかる。4は素焼の壺の蓋とみるが小片ではっきりしない。5は常滑様の大甕である。建物址出土陶器片は、美濃産が主となり、16世紀前半とみるものである。3の茶碗は、No.40センター杭北東の深耕地の荒れより出土したもので建物址以外である。白釉で、比較的高い高台をもち、底部に3条の沈線をめぐらしている。時期ははっきりいえない。

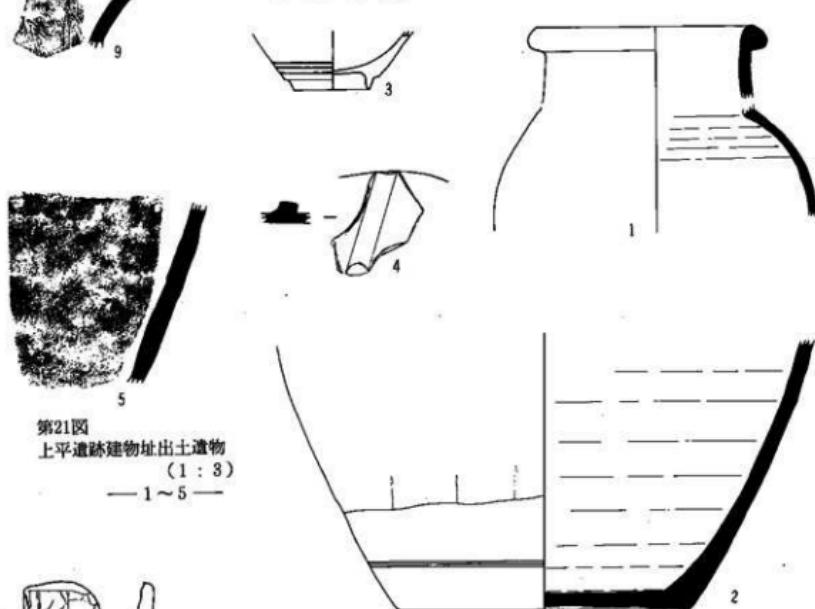
発見された建物址の規模は、比較的小さいが、囲炉裏をもち、良質な陶片の出土からみて、建物址はNo.40センター杭以北の深耕の荒れ地、また西側の用地外にその規模は広がるものと推測される。遺跡の北の背後をなす尾根状台地の西端には、中世竜東地区を支配した知久氏の支城松下城跡があり、その有力武士団の生活の場であった屋敷跡と思われる。



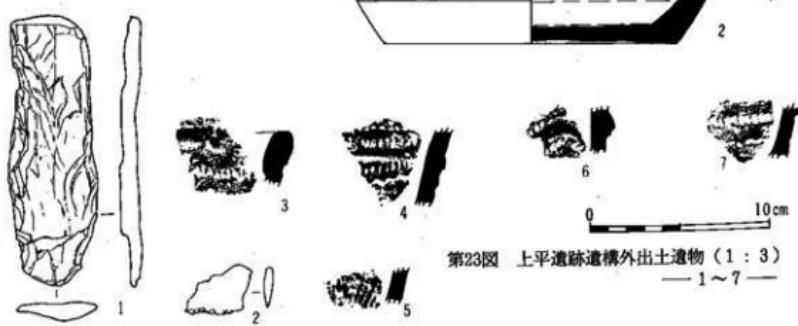
第20図 上平遺跡建物址



第19図 上平遺跡土壤出土遺物 (1 : 3)
 1・2…土1 3…土3 4…土4 5～7…土5
 8…土6 9…土2



第21図
上平遺跡建物址出土遺物
(1 : 3)
— 1 ~ 5 —



第23図 上平遺跡遺構外出土遺物 (1 : 3)
— 1 ~ 7 —

5. 上平遺跡配石 (第22図)

(1) 配石 1

上平幹線道路の南側下の道路境の傾斜面に発見され、東西長さ200cm、南北10~40cmの間に10cm大の礫を互に不規則に並び、西端部に人頭大石2個があり、ローム層に接してあり、人工的か、自然のものか不明の集石である。

(2) 配石 2

No40センター杭の南西6.5mに2号住居址の西壁を切ってある。西側には43×25cmの長方形の石がすわり、南側は約10cm大の礫が85cmの間に列をなして並び、東と北に20cm大の石が2個ずつ並んで、北側で120cm、南側90cm、南北80cmの巾が長方形に囲む配石である。遺物は何もなく、時代は不明であるが、弥生後期の住居北壁を切っていることからみて、それより新しいことがわかる。中世建物址の1部とも思われるが、周囲の耕作で荒れており、はっきりできなかった。



配石 I



配石 II



第22図 配石 I・II

6. 遺構外遺物 (第23図)

遺構外出土遺物の多くは、No40とNo41+6mの間の深耕により遺構破壊が予想された区域出土である。2の石器は上平幹線道路北側より出土したもので、チャート製石斧である。No45の東端、現道路の取付用地部分となる所で、遺構はなく上段より流入とみられた。石器は他に1の打製石斧がある。3~7の土器片は、いずれも半截竹管状工具による連続爪形文がみられ、縄文中期中葉Ⅲ期の土器とみる。No40センター杭以北の深耕地にこの期の遺構の存在が予想された。

7. 上平遺跡発掘調査出土石器一覧表

打…打石斧、横刃…横刃形石器、硬…硬砂岩、凝…凝灰岩、砂…砂岩、黒…黒曜石

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
縄文時代 石器								
1 住	7	12	打	凝	11.7	3.7	145	
	"	13	"	"	13.9	4.7	175	
	"	14	横刃	硬	5.3	9.1	65	
	"	15	"	"	5.4	9.6	80	
	"	16	打	"	9.7	5.1	103	刃部欠け
	"	17	"	"	8.8	4.0	90	"
4 住	9	16	打	凝	11.1	5.7	125	刃部欠け上層出土
	"	17	"	"	6.3	3.6	33	"
	"	18	"	"	6.1	4.7	58	"
	"	19	"	"	5.9	4.8	49	"
	"	20	石鍬	"	6.7	5.7	85	床出土
	"	21	打	"	12.9	4.2	185	"
5 住	11	4	"	硬	4.9	6.4	100	
	"	5	石鍬	黒	1.7	1.3		
6 住	"	10	打	硬	10.7	4.4	90	
土 壤	19	2	横刃	"	3.8	6.4	22	
弥生時代 石器								
2 住	15	5	横刃	硬	4.9	6.3	41	
	"	6	"	"	4.0	6.1	38	
7 住	15	20	石鍬	"	15.0	7.0	355	
		21	"	"	11.4	7.2	380	刃部欠け
		22	凹石	砂岩	8.0	12.6	560	
8 住	15	26	石棒	"	15.4	7.6	1,140	
遺構外								
	23	1	打	凝	1.5	4.4	120	
	"	2	石匙	チャート	2.5	3.1		基部欠け

IV ま と め

上平遺跡の立地をみると、南は急峻な段丘崖となり、北の背後は比高50mの尾根状の台地となり、その間に東から南へなだらかな下垣面を形成しているが、西端部を小川川の小支流神沢（からさわ）が韓國神社の東側を北へとのび、その谷頭浸蝕が強く東に折れて深い谷を形成し、段丘面の北側を約3分の1ほど入りこんでいる。また、段丘面の北側は一段低くなり、水田地帯となっている。試掘調査でみると、現水田の表土下はすぐに砂礫層となり、旧流路を示すものとみられた。遺跡は谷頭浸蝕の終わる地点から段丘面の中央部の南側の畑地帯に展開するとみられた。

昭和63年、工場進出に伴う用地内の段丘西端部では遺構ではなく、用地東側の段丘中央部の取付け道路の調査で縄文中期・弥生後期の土壙が検出され、段丘中央部よりに遺構の存在が予想された。

今次調査区域をみると、南の段丘端から30mの間は比高2mの傾斜をなし、表土は流されて浅く、遺構は検出されていない。また、北東のNo.43～No.46センター杭間の試掘調査では遺構は全くみられず、No.46杭地点では水田表土下は砂礫層となり、旧流路を示していた。

また、No.40～41センター杭+6m間は深耕によって遺構は破壊されていた。

発見された遺構は、No.40杭南西11m×西側14m間と、No.41杭+6mより道路までの14～20m×17mの用地内全面に遺構は集中検出された。

No.40南西よりは弥生後期住居址3軒と、中世後半武家屋敷とみる建物址2棟が、No.42杭を中心とする範囲では、縄文中期中葉住居址3軒・弥生後期住居址1軒・方形周溝墓1基・土壙6基が調査された。

No.41を中心とする深耕区域の試掘調査では縄文中期中葉土器片、中世後半の小陶器片の出土をみており、ここにも遺構が集中存在したものと予想された。さらに、地形的にみて調査区の一段上の畑、その上段の畑に遺構の存在が予想され、遺跡の中心の広がりが予想される。

出土遺物をみると、縄文時代では1号住居址を中心とした、半截竹管状工具による平行沈線文によって施文され、頸部は僅かにくびれ、器壁のうすい深鉢をなす平出III類Aを主体とし、半截竹管による連続爪形文土器が伴う。縄文中期中葉III・IV期に比定されるところ。これらの土器が4～6号住居址、土壙1・3～6号と遺構外出土土器の主をなし、縄文時代の下伊那地方では数少ない該期の遺跡として注視される。

弥生時代では、南のNo.40センター杭南に3軒の後期前半座光寺原式とみる住居址が発掘され、北はNo.42の地点に後期前半座光寺原式新段階とみる住居址1軒と、遺物はないが同時期とみる方形周溝墓1基と土壙1基を検出している。これらの時期については遺物は少なく、はっきりしない。

昭和63年工場進出に伴う取付道路工事の際検出された土壙内出土の大形壺は同時期であり、弥生後期の遺構は今次調査の北西側に広るともみれた。

建物址はNo.40センター杭南に2棟が検出されたが、その規模は小さい。しかし、建物址に圓炉裏をもち、遺物には美濃産とみる壺・大甕・常滑とみる壺片もみられている。西の用地外、また、北側の深耕による荒れ区域に広がる連物址の存在が予想され、段丘背後の尾根状台地にある松下城跡に関連する武士団の屋敷跡とみるものである。

おわりに、本次調査にあたって、地元の方々のご協力、作業にあたられた方々の御骨折りのあったことを深謝したい。

（佐藤 遼信）

図版 I 上平遺跡



上平段丘面（中段）

—大原よりみる



道路より南

後方は伊久間原遺跡



道路より北

後方は尾根社台地

図版II 試掘調査



No.38からNo.42 + 6 m
センター杭間のグリッド調査

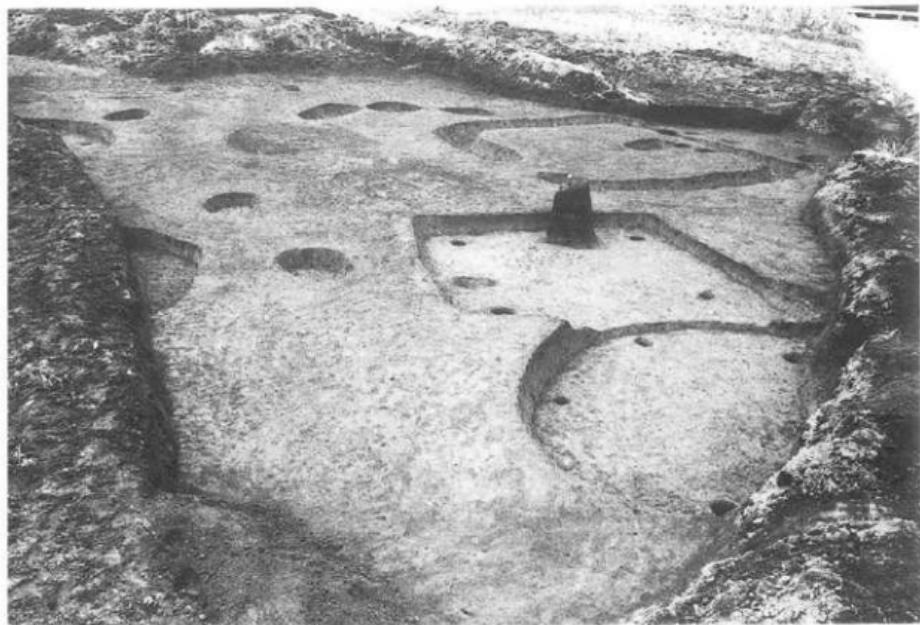


No.43からNo.45
センター杭間のグリッド調査

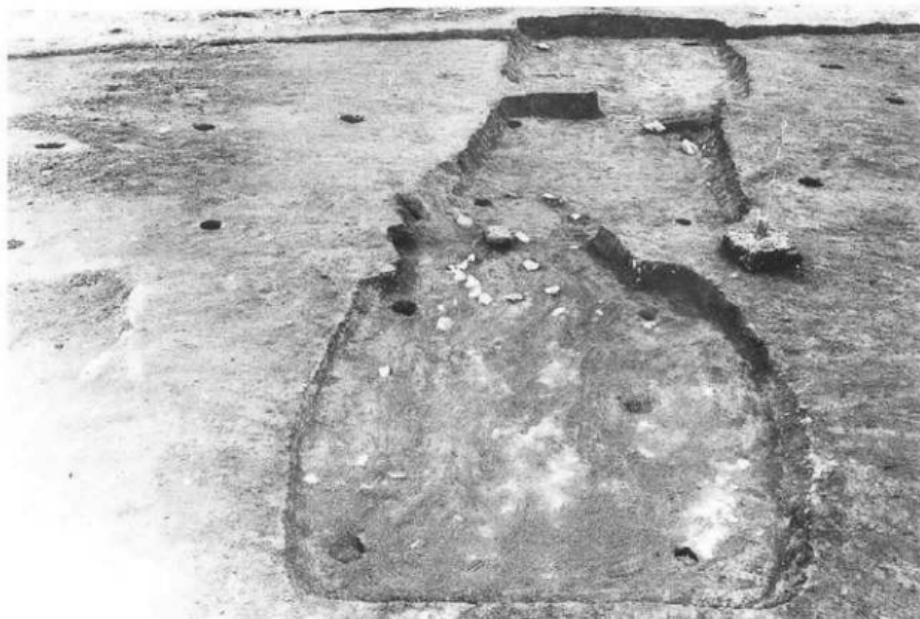


試掘調査出土遺物
左…縄文中期
中…弥生後期土器片
右…中世後半陶器片

図版III 遺構群



No.42センター杭を中心とした——東よりみる 國文中期中葉・弥生後期住居址。方形周溝基。土壌群



No.40センター杭を中心とした——東よりみる 弥生後期住居址。中世建物址。配石

図版IV 遺構・遺物



1号住居址 挿文時代中期中葉 ——左側は方形周溝で切られる



1号住居址 出土土器（平出皿類A）



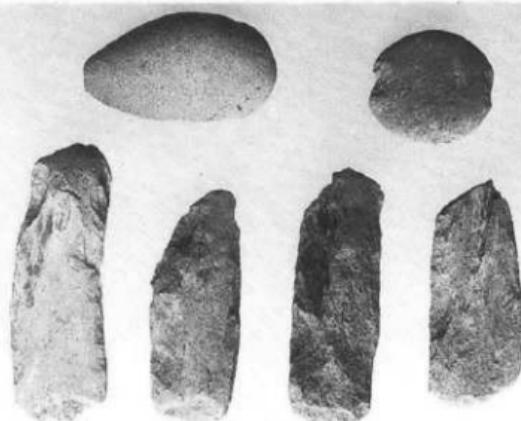
1号住居址 土壌状掘りこみ 内部より土器出土



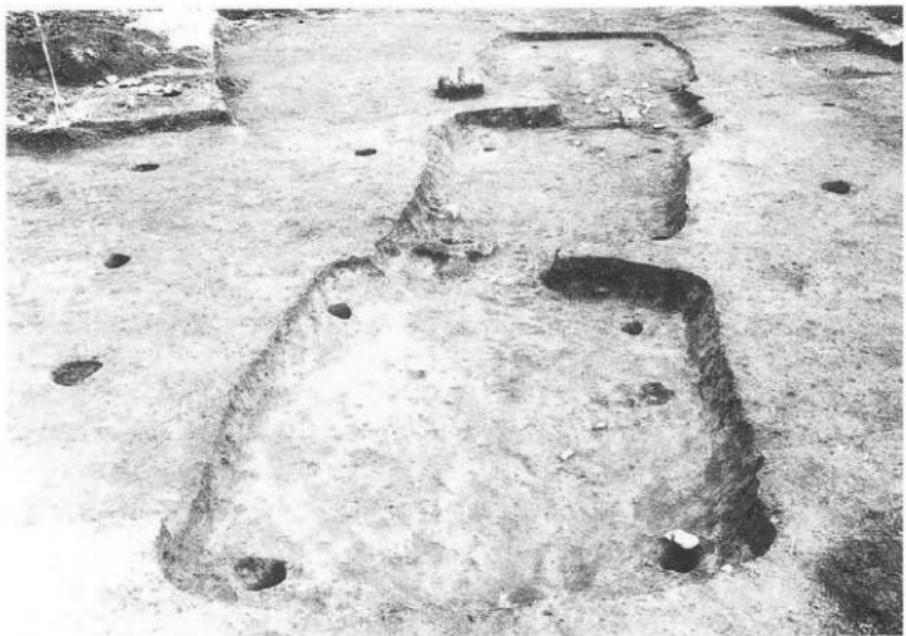
4号住居址
北側は道路にかかる
(右は3号住居址)



4号住居址、出土
縄文中期中葉の土器



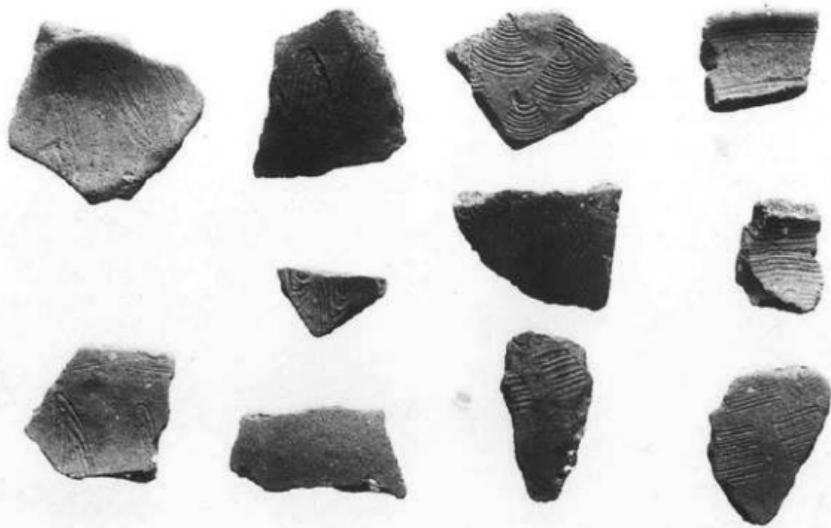
縄文中期の石器
1号・4号住居址出土
石器 (左3個1住、右
3個4住)



弥生後期 手前から 8号・7号・2号住居址



弥生後期 3号住居址 右側の杭。No.42センター杭 左 4号住居址の上にのる



弥生後期の出土土器



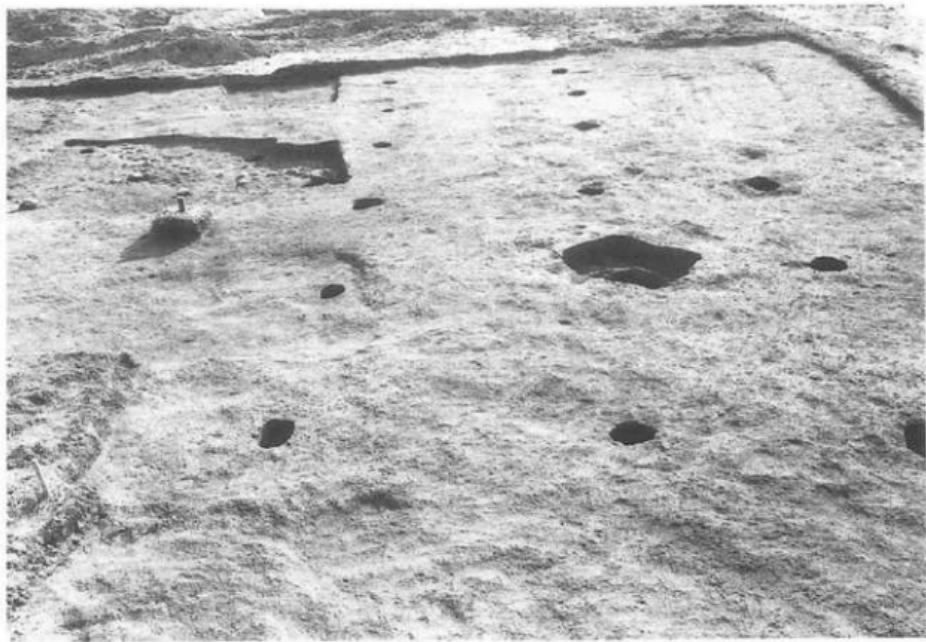
弥生後期の石器 左…8号住出土石棒 中・右は7号出土石頭 下は7号出土凹石



方形周溝墓



方形周溝墓…左上が主体部
右下が附壙

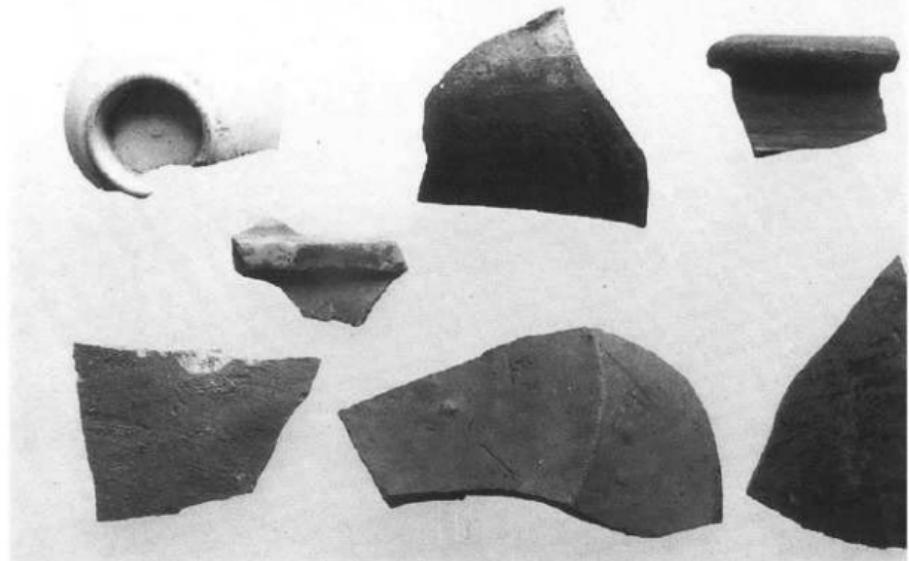


中世建物址

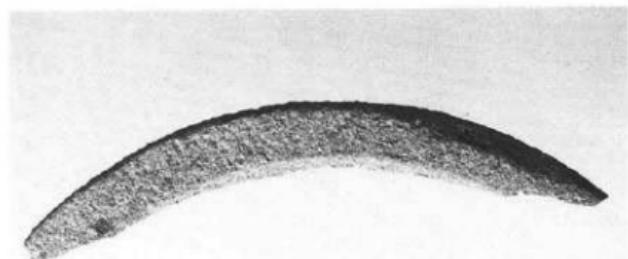
手前…1号・上…2号・中央右…团炉裏・左…弥生2号住



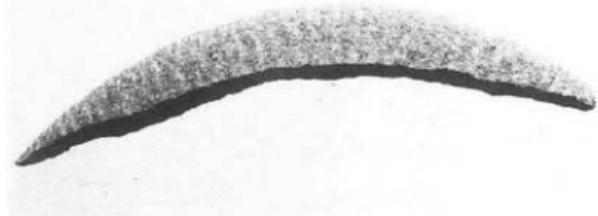
建物址内 团炉裏



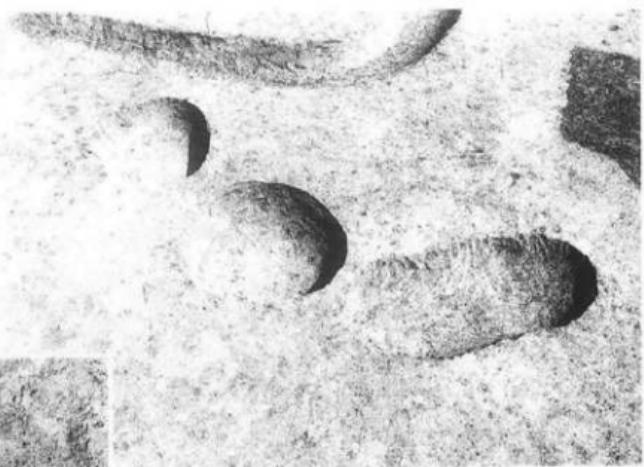
建物址出土 中世後半の陶器片



中世建物址出土
茶白下白縁部
上…内側
下…側面



縁の径は、松尾南原出土の
茶白にほぼ近い



土壤

右より 4号・5号・3号



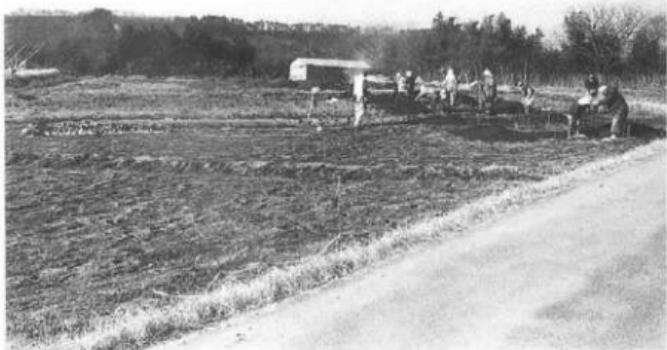
配石 1号



配石 2号

図版V

発掘スナップ



No.42センター杭を中心
に調査



No.45センター杭
東側取付道路の試掘調
査



重機による配石作業

調査団組織

1. 下平遺跡調査委員会

中川 煉	喬木村教育委員会委員長
下岡 重尊	喬木村教育長
桐生文雄	喬木村教育委員
鈴川英人	"
東原美寅	"
原五郎	喬木村文化財保護委員会委員長
黒川良一	喬木村歴史民俗資料館専門主事

2. 調査団

團長	佐藤 鮎信
調査員	牧内 住子
調査補助員	松下 真幸
"	田口 さなゑ

3. 作業員

細田七郎	福島 明夫	木下 喜代恵	原 隆司
大原久和	松島 美登里	池田 延子	原 礼三
池田シナ	上島 豊栄	森 美恵子	宮下 かず
市瀬長年	溝上 清見	依田 時子	塩沢 澄子
滝上正一	佐藤 いなゑ		

4. 事務局

柳沢治人	市瀬武文	原 俊道
------	------	------

上平遺跡

伊那南部広域營農団地農道
喬木村小川上平地区建設に伴う発掘調査報告書

1992. 9

長野県下伊那地方事務所
長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 株式会社秀文社

